

令和元年6月26日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04476

研究課題名(和文) 教員養成教育における国際化と国際教育の教育効果をめぐる科学的実証研究

研究課題名(英文) Globalization of teacher education: Empirical research on educational outcomes of global education

研究代表者

香川 奈緒美 (Kagawa, Naomi)

島根大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：80622399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：急速にグローバル化の進む社会において、教育実践を担う教師自身が、グローバルなものの見方や考え方を修得する必要がある。研究者は、教育効果検証に関して先進的な国際研究機関が行う教育効果検証の方法論とその研究結果活用方法について調査分析をおこなった。また、国内の教員養成課程に所属し、国際教育活動に参画した学生の意識調査をもとに、教員養成教育で求められる学びの形成に有効と考えられる我が国の学生の学びとその学びを形成する活動要素を抽出した。これら結果をもとに形成した国際教育プログラムの構成と教育方法、さらにはその教育効果測定の方法をについて成果発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学士教育のグローバル化対応とその進捗状況を示すことに用いられる指標は、国外派遣された留学生数、海外からの受入れ留学生数、英語言語能力など、容易に計測できるものに限定される傾向が課題としてある。また、課程認定等によるカリキュラムの自由度に制限がかかる教員養成目的学部では、国際教育活動がどのように養成する教員の資質能力向上に資するかを検討することが肝要である。この現状課題の改善と教員養成目的学部の特徴を踏まえ、本研究は、国際教育の結果得られる教師としての学びの大きさをグローバル化の指標として提案し、教育効果の検証をおこない、有意な国際教育プログラムを設計するための重要要素を抽出した。

研究成果の概要(英文)：It has been 10 years since Japanese Ministry of Education announced that they aim to educate globally competent teachers by expanding faculty's overseas training opportunities. However, there have been few empirical studies that report the effectiveness of overseas or international exchange to cultivate globally competent teachers. Our research was an initiative to develop an international education program that is designed within the teacher education curriculum. The objective of this research is to empirically verify the educational effect of the program on students' learning as educators. We have developed an international education program where university students with various cultural background work on a collaborative learning project. Developing an effective and valid measurement of the impact of the international education program. We measured the participants' perceptions about learning as educators and global competency skills by developing and conducting surveys.

研究分野：教師教育学

キーワード：教育評価 国際教育 教師教育 国際化 カリキュラム

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

#### 1. 研究開始当初の背景

「国際交流」と「教員養成」の接点は乏しく、「教員養成教育のグローバル化」という課題そのものが、教員養成の現場で十分に理解されていない(Klassen et.al. 1972, Glenn 1992, Pickert 2001, Schneider 2006, 岩田 2014)。グローバル化に伴う社会変化をうけて、米国では、2000年代に同様の課題意識が顕著になり、教員養成教育における国際教育の有意性をめぐる実証研究が進んだ。しかし、我が国では、研究的視点をもって教員養成教育における国際教育活動の教育効果を解明する取り組みは未だ十分とは言えない。このため、国際教育活動の有意性・必要性をめぐる議論において、実証研究に基づいた共通理解（ディスコース）形成が遅れている。

#### 2. 研究の目的

本研究は、教員養成教育におけるグローバル化対応の手段のひとつである国際交流・国際連携を活用した国際教育プログラムの在り方を理論的・実証的に検討する。特に、国際教育の教育効果を科学的に測定するために、国際比較を重視した理論的研究を行い、その結果をふまえた実証研究による国際教育プログラムの評価と改善に資する研究と実践のディスコースを構築する。そのうえで、教員の資質能力の総合的な向上を図る教師教育カリキュラム上に位置づけた新しい国際教育カリキュラムを開発し、その実践効果を検証する評価ルーブリックを提案する。

#### 3. 研究の方法

本研究では、まず以下の①②を行い、その結果を基に③を行う。

##### ① 国内の教員養成課程学生及び教師教育者の認識と現状の調査

文献調査、調査票・インタビュー調査、因子分析

##### ② 国外の教員養成教育における国際教育プログラムの調査

文献調査、調査票・インタビュー調査、テキスト分析

##### ③ 国際教育をめぐる課題抽出と教育効果をはかる指標の確立に向けた実証的研究

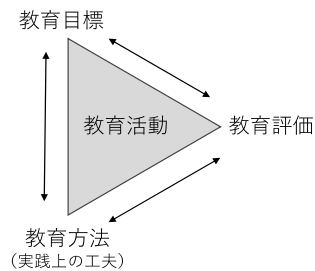
上記①②調査の総合的結果を基に、回帰・対応分析等、有効と判断した定量・定性分析

#### 4. 研究成果

##### ① 国際教育を教師教育のカリキュラム上に位置づける重要性を実証的研究調査によって示した

まず本研究の主要な成果として、国際教育は、教員養成・教師教育に限らず、学士課程教育においても、カリキュラム体系から乖離した教育活動として認識されているという課題の存在を明確にしたことがある。有効な教育実践は、(1)教育目標(Learning Objectives)、(2)教育実践上の工夫(Instructional Activities)、(3)教育評価(Assessments)の3要素の相互関係を必要とする(図)(Kuh, Kinzie, Schuh, Whitt & Associates, 2005)。この観点から考察すると、わが国の国際教育は、学士課程教育においても教員養成・教師教育においても、またその実践報告及び成果の提示のあり方においても、教育活動として考察する観点が希薄である。

グローバル化社会に応答する教師の育成を目的に、国際教育が推進される一方で、国際教育を教員養成・教師教育のカリキュラム体系を補完する教育活動として定義する必要性が認識されていない。このため、量的な機会拡大による学習者の自助的な学びを期待する希



図： 有効な教育実践の構成要素 (TEEI, 2008)

教育成果とする希望的有用感に依拠する国際交流プログラムを批判する観点から、教員養成・教師教育として実施する国際教育の目的を教師としての学びに設定し、その具体化に有効なペダゴジーの検討を加えた教育活動を企画した。異なる価値体系で教師として学ぶ両国の学生が、共通したテーマのもとで協働学修に取り組むことで、国際教育に関わる日米両国の学生が他者視点への気づき、多角的視点の活用、そして批判的思考による価値相対化の可能性を

表：履修理由をもとにした因子分析結果

調査項目 (事前・事後調査)

自己を批判的に省察する力	批判的省察力	意図する目的
自己を客観的に認識する力	客観的認識力	
外国語コミュニケーション力	外国語能力 A	想定的外部 の目的
外国語読解力	外国語能力 B	
相手の文化習慣の知識	異文化知識 A	想定する 副次的な目的
相手の社会常識の知識	異文化知識 B	
具体的な他者の視点から考察する力	他者視点 A	
他者の経験を推察する力	他者視点 B	

事前調査 (因子分析)

	成分	
	1	2
批判的省察力	-0.15	0.911
客観的認識力	0.034	0.741
外国語能力 A	0.783	-0.113
外国語能力 B	0.837	-0.021
異文化知識 A	0.851	0.149
異文化知識 B	0.77	-0.273
他者視点 A	0.589	0.578
他者視点 B	0.651	0.315

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiserの正規化を伴うオブリミン法

事後調査 (因子分析)

	成分		
	1	2	3
批判的省察力	-0.08	0.877	-0.146
客観的認識力	0.145	0.901	0.158
外国語能力 A	0.134	0.21	-0.874
外国語能力 B	-0.084	-0.22	-0.935
異文化知識 A	0.822	-0.224	0.034
異文化知識 B	0.553	-0.529	-0.049
他者視点 A	0.881	0.105	0.075
他者視点 B	0.712	0.238	-0.213

を実感し、主体的な学習行動、チームワークと建設的なコミュニケーション能力を形成することを狙いに定めた。

教員養成・教師教育のカリキュラム上に位置づけた国際教育の教育効果として、どのような能力に関わる学びが期待できるのかを明確にするため、例えば、受入型プログラムの履修生に、国際教育に参画するにあたって、自らに不足する能力は何かについて多項目複数回答選択式で調査した。回答結果に因子分析を行うことで(表)、国際教育によって獲得が期待できる複数の能力間の構造の解明を行った。

事前調査では、「外国語能力」と「異文化知識」とが一つの能力として認識され、「批判的省察力」が別の能力として認識されていた(オブリミン法による

主成分分析・67.79%の分散が2因子に集約された)。しかし、プログラム終了後の調査では、「批判的省察力」が依然として他の能力から独立した力として認識されるとともに、「外国語能力」と「異文化知識」とが、それぞれ異なる能力・知識であるという認識の変化があった(オブリミン法による主成分分析・77.16%の分散が3因子に集約された)。

異なる文化背景をもつ他者との協働学修の受講後に、外国語能力(言語力)と、相手の文化習慣の知識や社会常識の知識といった異文化知識とが、それぞれが個別に必要な力・知識として認識されているのと同時に、異文化知識の必要性が、他者視点の必要性と関連して認識されている。この変化は、異文化が示す表面的な差を超えて、

望的有用感への依存が顕著であり、効果的な学びの形成を具体化するペダゴジーの検討が大幅に遅れていることを示した。

② 教員養成カリキュラム上に位置づけた国際教育の教育効果測定の方法とその方法論を提案した。

この国際教育の開催そのものを

他者視点として異文化をとらえた高次な気づきが形成されている可能性を示した。

国際交流型の国際教育プログラムの多くが、外国語学修と異文化理解を(十分な検討を経ずに)期待される教育効果として併記している。しかし、調査の結果は、この併記が教育の目標を曖昧にするとともに、教育効果に負の影響を与える可能性を示唆する。このため、特に教員養成・教師教育として実施する国際教育のカリキュラム設計においては、外国語能力の獲得を目的とするカリキュラムと、異文化を介した他者視点の獲得を目的とするカリキュラムとを明確に区別する必要性を示した。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

香川奈緒美・百合田真樹人 (2017)。教員養成課程での国際教育活動の効果検証—カリキュラムを補完する国際教育のあり方をめぐって— 日本教師教育学会年報 第 26 号 pp.76-87

百合田真樹人, 香川奈緒美(2015)。教員養成課程のグローバル化の実践と評価：国外大学との協働学修プログラム。『日本教育大学協会研究年報第 34 集』,153-166.

[学会発表] (計 8 件)

持続可能なアクティブ・ラーニングの要素：教師の能力形成  
香川奈緒美, 百合田真樹人. 第 27 回日本教師教育学会研究大会. 2018. 東京学芸大学

香川奈緒美, 百合田真樹人. 日本教育学会研究集会. 2018. 宮城教育大学  
多元的学力観を反映する教育効果の調査測定方法の検討と試案

百合田真樹人, 香川奈緒美. 日本教育学会研究集会. 2018. 宮城教育大学  
多元的学力観をめぐる国際的調査研究の方向性

Wong, D. & Kagawa, N. (March, 2018). Education Abroad Programs: The Worst Place for Intercultural Learning? Paper presented at the annual conference of The Forum on Education Abroad, Seattle, WA.

教員養成・教師教育におけるアクティブ・ラーニングの実践課題  
香川奈緒美, 百合田真樹人. 第 27 回日本教師教育学会研究大会. 2017. 奈良 9 月 29 日～10 月 1 日

教員養成教育カリキュラムを補完する国際教育活動の設計とその効果検証  
百合田真樹人, 香川奈緒美. 日本教育学会研究集会. 2017

Wong, D. & Kagawa, N. (March, 2017). Beyond cultural difference as problem: Fostering the unique potential in intercultural collaborative work. Paper presented at the annual conference of The Forum on Education Abroad, Seattle, WA.

Wong, D., Kagawa, N., & D. Bramham (November, 2016). Beyond cultural difference as problem: Fostering the unique potential in intercultural collaborative work. Paper presented at the annual conference of Council on International Educational Exchange, Los Angeles, CA.

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：百合田真樹人

ローマ字氏名：Makito Yurita

所属研究機関名：独立行政法人教職員支援機構

部局名：次世代教育推進センター

職名：上席フェロー

研究者番号（8桁）： 40467717

40467717

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。